



北海道大学プラス・ミュージアム・プログラム特論
工学研究院 × 文学研究院クロストーク

つながる・ひろがるミュージアムの未来－ 空間・ことばにおける日常化と異化

ミュージアムは、時には展示物を黙って眺める閉ざされた空間であったり、
時には動物園のように開かれたものであったり、
公共空間として私たちの生活に馴染んできました。
そして現在は、ミュージアムの役割の拡張とともに、ミュージアム空間の
異化が促されて、壁の中で完結することなく、
ミュージアムを中心に形成された領域がひろがっています。
日本の建築における空間に対する捉え方の変容。
目に見えない仕切りを建てる「禁止事項」の文化背景と歴史。
ミュージアムという空間によって作り出された
「鑑賞者」が発した「ことば」の価値とはどのようなものなのか。
さまざまな話題を横断しながら、つながって・ひろがっていく
ミュージアムの未来について、「空間」と「ことば」を切り口に考えました。



日時／2022年12月17日(土)13:00～16:00

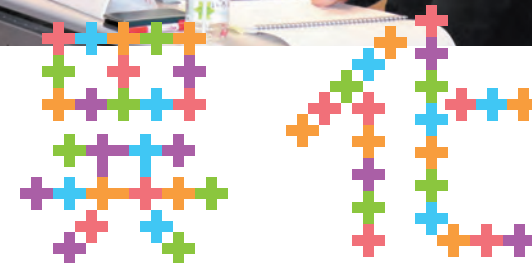
会場／北海道大学総合博物館1階 講演室・知の交差点
※対面形式のみ

プログラム／13:00～13:10 開催の挨拶、趣旨説明
13:10～14:30 パネリストからの報告
14:30～14:50 休憩
14:50～15:50 ディスカッション

パネリスト／小澤 丈夫(北海道大学工学研究院教授、北海道大学総合博物館館長)
今村 信隆(北海道大学文学研究院准教授)
小篠 隆生(北海道大学工学研究院准教授)
佐々木 亨(北海道大学文学研究院教授)

司会／卓 彦伶(北海道大学文学研究院特任准教授)

参加者のべ19名



堅いミュージアム、柔らかいミュージアム

今村 信隆(北海道大学文学研究院准教授)

文学と工学。ともすれば、接点が少ないと感じられてしまいがちな、2つの領域かもしれません。ただ、私個人としてはこれまで、工学研究院の先生方と何度か一緒にお仕事をさせていただくなかで、不思議とじっくりくると、腑に落ちることが多かったように思っています。これは、私自身が芸術学や博物館学を学びながら、知らぬ間に、空間でものを考えるというスタンスに馴染んできたからかもしれません。机上で理論的に思弁して終わりとするのではなく、現場で、手と眼を抛り所にして考えるという思考法に憧れを抱いているからかもしれません。あるいは、



古代ギリシアで用いられた「テクネー」という語が「技術」と「芸術」の両方の意味を内に秘めていたように、工と文とは元来近い領域なのだとすると、大袈裟に過ぎるでしょうか。いずれにせよ、工学研究院の先生方と議論を交わすことができたこのたびのイベントでは、さまざまなトピックに触れながら、愉しく学びを深めることができました。

小澤丈夫氏のお話は、鉄筋コンクリート造の堅牢な東京国立博物館の事例から出発しました。近代的なミュージアムのイメージはそうした、小澤氏の言葉を借りるならば「金庫のような」建物だったと言えるでしょう。ただ、建築の歴史を振り返ってみると、そうした建物とは対照的な事例、たとえば内と外との境界をあえて曖昧にしてみたり、立派な壁によってではなく簡素な柱によって境界を立ち上げたりという事例が、多く認められるそうです。小澤氏が見せてくださった風通しの良い、居心地の良い語らいの空間が、ミュージアムにもヒントを与えてくれるように感じます。

小篠隆生氏の講演は、俯瞰的な地図という表象を入口にしながらも、お話が進んでいくにつれて次第に視線を下げていき、歩く人・生きる人の視点から空間を考えることへと進んでいったという印象です。小篠氏が示されていた

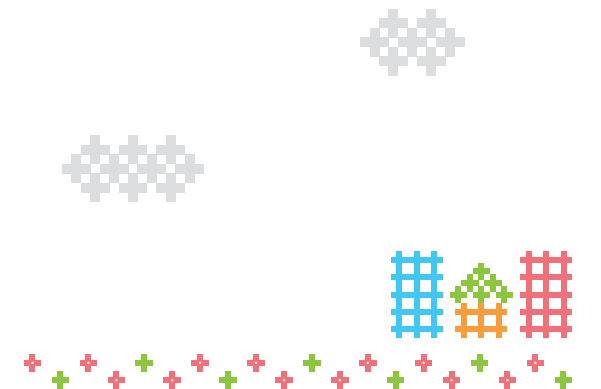


何気ない路地の写真などは、確かに、地図で見れば一本の線に過ぎないのでしょう。しかしその境界には人の営みがしっかりと息づいていました。路地においても、あるいは公共空間や公共施設においても、ここはこのような場所だと予め決めつけるやり方には限界があります。既定の目的や既存の境界にしばられず、小篠氏がいう創造のための「余白」を残しておくこと、そして人びとのその都度の活動を受け止めながら成長していくことが、これからの公共空間には求められているのかもしれません。

佐々木亨氏が紹介してくださったのは、ご自身が主導して行っている最新の来館者調査(於広島県立美術館)についてです。といっても単なるアンケート調査ではありません。展示室内での来館者の行動をトラッキングしたり、相当の時間をかけてインタビューを行ったり、事後的なアンケートに回答してもらったりといった手法を立体的に組み合わせた、総合的な調査です。ここから見えてきた、一人一人の来館者が携えているさまざまなストーリーには、驚くほどの豊かさがありました。その人の生活のなかでのミュージアムの位置づけ、個人的であるがゆえに切実な来

館の理由などは、単なるアンケートだけでは決して見えてこなかったものと佐々木氏は説いています。ここでは、来館者の立体的な姿が提起されるとともに、ミュージアムの空間が誰にとっても同じ意味をもつ場所ではないのだということが示されました。

先ほどの小篠氏が触れておられた創造のための「余白」は、ミュージアムに自らの日常や自分ならではの物語を接続しようとする来館者にとっても、必要なのだと思います。というのもミュージアムを味わうという経験は、特定の価値観を一方向的に押し付けられるような受動的な経験ではなく、極めて創造的な経験になりうるからです。わたしたちはミュージアムを、堅くて重い金庫としてではなく、風通しがよく柔らかな語らいの空間として、新しい創造を許す街の余白として、今後も楽しむことができればと思います。



境界で繋がるということ

大内 須美子(北海道大学プラス・ミュージアム・プログラムスタッフ、北海道大学大学院文学院博物館学研究室 博士後期課程)

北海道大学総合博物館内のカフェに隣接する開放的な会場で開催された今回の講義は、来館者も自由に聴講できるオープンな雰囲気の中で催されました。

小澤丈夫先生は、収蔵品を守る堅牢な建築物や、屋内と屋外の境界で自由な境界・空間を楽しむ日本文化について示してくださいました。今村信隆先生のお話からは、今のミュージアムは声・笑・売買・飲食などの人々のライフを境界の外に押し出しています。明治初期の展覧会群衆図では人々は笑い、指さし、語り、共感しながら観覧していたことがわかりました。小篠隆生先生は、固定観念を見直し、境界で切るのではなく境界で繋ぐことが重要で、余白があるからこそ想像できる空間になる事例を紹介してくださいました。佐々木亨先生は、来館によって呼び覚まされる一人一人のストーリーがあり、ミュージアムは「記憶の出会いの場」として機能していることを示唆してくださいました。先生方のディスカッションでは、日本建築では形式や型を受け継いできたこと、収蔵品を大事にしようというミュージアムの型が組織的に作られてしまったのではないかと、本来はもっと自由だったのではないかなどの意見が交わされました。

いったいつからミュージアムがこんなに堅苦しい、

人を拒絶するような空気をまとったようになったのでしょう。魅力的な企画展示を観にミュージアムを訪れるとき、やはり少し緊張しながら体験する自分に気づきます。でも、地域の小さなミュージアムでは、語り、遊び、分かち合いながら観覧する様子も少なくありません。

ミュージアムが上から定まった価値を押しつける時代が終わって、共感するプロセスを大事にしていく時代になったという今村先生の言葉が印象的でした。美術館の踊り場の椅子で、外を眺めてゆっくりする、そんな風にリラックスできる空間が身近にあるようなところに住みたいと思いました。そして自分自身も境界を作りすぎず、自由な発想を心がけたいと感じました。

